

玄遠俳句

令和7年
12月号

干柿

早村 春鶴

皮むきし干柿熟し落ちてをり
秋高し園児の声の空に消へ
フェリー出航追ひ越す渡り鳥
秋祭太鼓打つ音途絶へがち
秋祭地車は軽トラ過疎の村

柿好き

山本 春英

廃屋に柿の実たわわ色づきぬ
秋風や遠来の客待ち遠し
柿好きの姉のむく皮途切れずに
秋の夜や母子の鹿の目の光る
ひと盛りの柿をデザート夕餉後

こおろぎ

森本 智子

こおろぎの休み休みに上る坂
溪流へふわり迫り出す芒の穂
秋風や悲しき報の短かくて
幟多々聳ゆ参道秋祭
観ておれば刈られてをりし酔芙蓉

秋味覚

山内都代子

町中の一角広し刈田かな
橡の実の苦み好みし餡こ餅
酢橘来る端々しき青友と分け
紅葉刈り鉢植へなれど大自然
秋祭アウトレットの賑はひて

秋思

坂井 白萩

寒露朝やうやく届く肌に風
秋祭神事務める父の顔
秋祭幼児背伸びし地車の綱
柿食へば昔の古里祖母の味
秋祭急坂の地車動かさる

※地車…木の子のみこしの様なもの

※橡…丸い栗に似た実、ほろ苦い

※酢橘…徳島の名産、酸味の多い実

